

主 題：世の光である御子イエス②**聖書箇所：ヨハネの福音書 8章13－20節**

この朝見ていきたいのは、ヨハネの福音書8章のみことばです。先週から私たちはヨハネ8：12－20を通して「世の光である神の御子」について考えてきました。特に、今回は12節を中心にイエス様が世の光として来られたとは、どのような意味だったのかを改めて学んだのです。いったい何を意味していたか覚えていますか？当時のイスラエルの人たちにとって、光は特別な意味を持つものでした。たとえば、光はかつて民が荒野を40年間さまよっていた時、常にそばにいた神様の臨在を思い出させるものでした。また、同時に光は後にやって来る約束の救世主を期待させるものでした。人々にとって、光は些細なものだったわけではありません。光は彼らの歩みにとって、欠かすことのできないまことの神様の助けや救いの源となる喜びの存在を表すものだったのです。人々にとって光は特別なものでした。そして、そのような考えを持っている人々の前に立ったイエス様は、「わたしは、世の光です」と宣言しました。訴えていたことは明白でした。イエス様はご自分こそが民とともにいる、必要な守りや導きを与えることのできるまことの神であること、人々が待ち望み続けてきた約束の救い主であることを明らかにされていたのです。これが「世の光」として来られた方の大胆で確かな証言でした。

きょう私たちが見ていきたいのは、この場面の続きです。目の前で、このことばを聞いていたパリサイ人とイエス様との会話が13節のところから記されています。いったいどのようなやりとりがなされていたのか——。実際のみことばに目を留めてみましょう。

○世の光である御子の証言：信頼できる三つの理由**ヨハネ8：12－20**

「12 イエスはまた彼らに語って言われた。「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」13 そこでパリサイ人はイエスに言った。「あなたは自分のことを自分で証言しています。だから、あなたの証言は真実ではありません。」14 イエスは答えて、彼らに言われた。「もしこのわたしが自分のことを証言するなら、その証言は真実です。わたしは、わたしがどこから来たか、また、どこへ行くかを知っているからです。しかしあなたがたは、わたしがどこから来たのか、またどこへ行くのか知りません。」15 あなたがたは肉によってさばきます。わたしはだれをもさばきません。」16 しかし、もしわたしがさばくなら、そのさばきは正しいのです。なぜなら、わたしひとりではなく、わたしとわたしを遣わした方がさばくのだからです。」17 あなたがたの律法にも、ふたりの証言は真実であると書かれています。」18 わたしが自分の証人であり、また、わたしを遣わした父が、わたしについて証されます。」19 すると、彼らはイエスに言った。「あなたの父はどこにいるのですか。」イエスは答えられた。「あなたがたは、わたしをも、わたしの父をも知りません。もし、あなたがたがわたしを知っていたなら、わたしの父をも知っていたでしょう。」20 イエスは宮で教えられたとき、献金箱のある所でこのことを話された。しかし、だれもイエスを捕らえなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。」

これまでもいろいろな場面で、聞かれたことがあると思いますけれども、改めて皆さんに質問です。皆さんは、イエス様を信頼しているでしょうか？この方のことばをどのような時も真実であるとすなおに、信じ受け入れているでしょうか？残念ながら、当時のパリサイ人たちは信じていませんでした。「わたしは、世の光です。」というイエス様の訴えを聞いた時、彼らはそのことばの意味を全く理解しなかったわけではありません。彼らは、イエス様のご自分を「まことの神様だ」と主張していることをよくわかりましたが、好ましく思いませんでした。その真理をすなおに受け入れたくありませんでした。だからこそ、彼らはイエス様のことばには真実性が欠けていますと、このような証言を受け入れる必要はないと非難

したのです。13節を見ていただくと、彼らはこのようなことを言いました。「そこでパリサイ人はイエスに言った。「あなたは自分のことを自分で証言しています。だから、あなたの証言は真実ではありません。」と。ある意味で、彼らの非難のうちには正当な部分もありました。

当時、ユダヤの律法によれば、法廷でなされる公の証言には自分だけのことばではなくて、ほかの人のことばによっても立証される必要がありました。たとえば、申命記19:15にこのようなことばが書かれています。「どんな咎でも、どんな罪でも、すべて人が犯した罪は、ひとりの証人によっては立証されない。ふたりの証人の証言、または三人の証人の証言によって、そのことは立証されなければならない。」と。また、ユダヤ人の歴史を描いた文献の一つ『ミシュナー』の中にもこのようなことばが残っていました。「二人の人がいて、一人が『私は祭司である』と言い、もう一人も『私は祭司である』と言っても、彼らは信じられない。しかし、互いに相手についてそのように証言するならば信じられる。」と。ですから、律法に精通していたパリサイ人たちは、イエス様のことばを聞きながら面と向かって反論しました。「あなたは、単に自分で自分のことを話しているにすぎません、自分が言いたいことだけを言っているにすぎません。そのようなひとりよがりのことばは信頼できません、したがって、私たちがそのような信頼できないことばに耳を傾ける必要はありません」と。

その光景を少し思い浮かべてみてください。今回の出来事が起こっている場面は、仮庵の祭りという年に一度の大きな祭りの時期のことでした。エルサレムの町には、何万、何十万という人たちが集まっていて、特に、この時イエス様がいた神殿、20節を見ると「献金箱のある所」と書いていますけれども、「献金箱のある所」とは婦人の庭という場所でした。そこには男女問わずたくさんのユダヤ人が集まっていたのです。イエス様が、「わたしは、世の光です。」と語った時、周りにはたくさんの人たちがいました。そして、人々の中にはそのことばを聞きながら、驚きを覚えた人もたくさんいたでしょう。この人物が言っていることばは、本当に信頼できるのだろうかと疑問を抱く者たちもたくさんいたでしょう。ましてや、そこには当時の社会で、一線を画していた律法に熱心なリーダーたちが「この人のひとりよがりな証言は、真実ではありません」、「この人の言っていることは信じられるものではありません」と強く訴えていたのです。まさにこの緊迫した場面は、イエス様とそのことばの真実性が試されていました。「わたしは、世の光である。」と証言する方をすなおに信じて、そしてこの方に自分のすべてをゆだねていいのかどうか疑問が投げかけられていたのです。イエス様はそのような疑問に対して、真っ向から答えられました。ご自分のことばが、いかに信頼でき、真実であるかを三つの理由をもって応答されるのです。いったいどのようなものだったのか、三つの理由をきょうは順番に見ていきたいと思います。そして、これらの理由は、今の私たちにとってもイエス様のことばに対する信頼を増し加える大きな励ましになるのです。私たちも同じように安心して身をゆだねることのできるイエス様と、そのことばいかに確かなものなのかを改めて一緒に考えてみましょう。

1. 証言者の起源、出身のゆえ 14節

では、どうして御子のことばが信頼できるのか、一つ目の理由は、証言者の起源、出身のゆえです。もう少し簡単に言うと、ことばを語っていた証言者イエス様が、どこから来たお方だったのかという起源が、イエス様のことばと証言を確かなものとししました。イエス様はどこから来たのかをはっきりと示されるのです。非難しているパリサイ人に対して、イエス様は14節でこのように答えました。「イエスは答えて、彼らに言われた。「もしこのわたしが自分のことを証言するなら、その証言は真実です。わたしは、わたしがどこから来たか、また、どこへ行くかを知っているからです。しかしあなたがたは、わたしがどこから来たのか、またどこへ行くのか知りません。」と。いったい何を言わんとされたのかというと、ポイントは明白でした。イエス様はご自分の出身、もとの住まいが天であることを明らかにしました。「わたしは、自分が天から来たこと、そしてこの後、将来においてまた自分が再び天に戻っていくことを知っています」と。イエス様は天から来られたお方でした。別の箇所でもイエス様ご自身が、同じことを繰り返し教えています。イ

イエスはこのようなことをヨハネ 16 : 28 でも言われました。「わたしは父から出て、世に来ました。もう一度、わたしは世を去って父のみもとに行きます。」と。イエスは天から来られたので、天に帰られるお方でした。つまり、イエスは自分自身の語っていた証言は、自分が勝手に作り出したものでも、別のだれかから人づてに聞いたものでもなく、天にいる父なる神様から直接受けたことばだということを明らかにしていたのです。私が話しているのは天からの直接のことばです。思い出していただきたいのは、このことにイエスが触れていたのは、今回が初めてではありません。これまでも何度も何度も人々の前で、この真理を口にしていました。ヨハネ 7 章の中では繰り返しそのことを言われています。7 : 16 でイエス様はご自身の教えに関してこのようなことを言いました。「そこでイエスは彼らに答えて言われた。「わたしの教えは、わたしのものではなく、わたしを遣わした方のものです。」と。また、同じ 7 : 28 - 29 では「:28 イエスは、宮で教えておられるとき、大声をあげて言われた。「あなたがたはわたしを知っており、また、わたしがどこから来たかも知っています。しかし、わたしは自分で来たものではありません。わたしを遣わした方は真実です。あなたがたは、その方を知らないのです。:29 わたしはその方を知っています。なぜなら、わたしはその方から出たのであり、その方がわたしを遣わしたからです。」とされています。イエス様は、繰り返し、繰り返しご自分がだれなのかを教えました。イエス様は確かに天から遣わされたお方でした。だからこそ、この方だけが父なる神様をご存じで、神のことばを直接伝えることができました。天から来られた方だからこそ、地上の人には到底できないような偉大なみわざをなしたのです。

そして、その姿を実際に見た人たちは、そのすばらしさは普通ではないことに気づいていました。たとえば、当時、ユダヤ人の著名な指導者だったニコデモがイエス様のもとにやって来た時に、ヨハネ 3 : 2 で彼がこのように言います。「……「先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられるのでなければ、あなたがなされるこのようなしは、だれも行うことができません。」と。イエス様の弟子ではない、当時の有名な律法の教師が、イエス様の姿を見た時に、この方は普通ではないと思いました。それだけではありません、たとえば、パリサイ人がイエス様を捕えるために遣わせた役人は、帰って来てこのような報告をしていました。7 : 46 に「……「あの人が話すように話した人は、いまだかつてありません。」と記されています。イエス様は、だれの目で見たとしても、驚くべき、間違いなく天から来られたお方でした。そして、本来であれば、これで十分のはずでした。何かほかに証拠を出す必要も、だれか別の証人を立てる必要もありません。うそをつくことのない真実の神様から遣わされて来た御子が話されていることばであれば、人はそれをすなおに信じ、受け入れるべきでした。天から来られた方が話していることば以上に、真実な信頼できることばはなかったのです。

しかし、結局のところパリサイ人はかたくなに信じようともしませんでした。この姿から私たちが言えることがあります。それは、イエス様を信じる本当の信仰は、多くの知識や納得する証拠から生まれるものではないということです。仮に知識や証拠が救いを生み出すのであれば、パリサイ人こそ救いに最も身近な存在だったと言っても過言ではありませんでした。彼らほど旧約の知識に通じていて、目の前で信じられないような奇蹟を見て、直接、世の光であるお方からことばを聞いていた者はいなかったのです。しかし、彼らの持っていた知識や証拠は、彼らをへりくだらせるのではなく、高慢にしました。霊的暗やみの中で、目が見えなくなっていたからこそ、目の前に世の光が輝いていたのに彼らは気づきませんでした。不信仰の問題は、いつの時代でも同じです。知識や証拠の話ではなく、真理を自分のこととして受け入れたくないかたくなさ、神様をすなおに認めたくない自分自身の高慢さが、不信仰の問題の根にあるのです。

今の時代でも変わりません。皆さんもどこかで聞いたことがあるかもしれませんが、ある人は聖書とは別の証拠を持ち出してきて、論理的な議論をもって人々を何とか納得させようとすることもあります。たとえば、考古学や歴史、科学的な研究の観点などから、いかに神様やみことばが真実であるかを主張したりするのは、考古学や歴史を学ぶこと自体が悪いわけではありません。そのような知識や証拠は、信

仰者が学べば学ぶほど、信仰をさらに深める助けや励ましになります。しかし、覚えていないといけないことは、数々の証拠が、神様を知らない人のうちに救いや信仰をもたらすわけではないということです。納得できる答えを手に入れば、人が自動的に信じるようになるわけではありません。救いは常に私たちの盲目でかたくなな心を変えてくださる主の恵みのみわざのゆえでした。主のあわれみがなければ、だれも救いの真理を知ることはないのです。「世の光」を光として認められるのは、光を研究した時ではなく、光をへりくだってすなおに見る時です。C・J・ライトという先生もこのようなことばを残していました。「光が光であることを、一体何によって私たちは確信できるのでしょうか。それは、光が私たちに対して果たす働き以外にありません。光が光であることは、論説やその光を構成する光線の分析によって立証されるものではありません。光が私たちを照らし、いのちを与えるときこそ、それは私たちにとって光なのです。」と。イエス様は「わたしは、世の光です。」と言われていました。どのような証拠も必要ありません。だれが何と言おうとも、この方は確かに天から来られた「世の光」でした。そして、天に起源を置いているお方が話されたことばは、私たちにとってどのような時も信頼できる真実のことばだったので

2. 証言者の正しさのゆえ 15-16節

次に、二つ目の理由は、証言者の正しさのゆえです。「わたしは、世の光で」と語っていた証言者イエス様が、いつも真実なお方であることがこの方の証言を確かなものとなりました。15節でこのようにイエス様は語られています。「あなたがたは肉によってさばきます。わたしはだれをもさばきません。」と。イエス様はここでパリサイ人に対する強い非難を口にしました。「あなた方は肉によってさばいています」と。これはどのような意味だと思いませんか？鍵になるのは、この「肉」と訳されていることばです。「肉」ということばは、人の外側やうわべ、また、人の価値観や基準を表すものでした。つまり、彼らのさばきは、人の本質や中身を正しく見極めようとするものではなく、ただ表面的なジャッジを勝手に下すものでした。これと同じ問題は、別の箇所でもイエス様によって問題視されています。7:24でもイエス様は、このような警告を与えていました。「うわべによって人をさばかないで、正しいさばきをなさい。」と。残念ながら、パリサイ人のさばきはうわべだけのものでした。常に、目に見えている外側の部分だけ、人間的な基準に基づく誤った判断でした。そして、彼らは「世の光」を目の前にした時でさえ、この方を自分の基準や考えで測ろうとしたのです。そのような間違った基準で判断を下そうとしたからこそ、彼らはこの方が言っていることは真実ではないと、すなおに受け入れない間違った結論に達したのです。神様のことばを自分たちの人間的な考えや判断基準でジャッジすることは、間違った結論へと導くことでした。

「肉のさばきをしてはいけません」とはどういうことか、立ち止まって考えてみてください。私たち自身も神様やみことばを肉によってさばいていることはあります。たとえば、このようなことはありませんか？私たちはみことばを自分の気分や感情のものさしで測ることがあります。神様はこのように命令しているけれども、今の自分の状況ではこれには従いません、これには従いたくありませんと、そのような勝手な判断を下すことがあります。みことばは何も変わっていません。みことばを判断する自分が、すなおにそこに書かれていることを信じ受け入れ、従うことよりも自分の気分や感情を優先するのです。また、私たちはそれ以外でも、これまで自分はこのようにやってきました、これが社会でも当たり前だと思われていますというように、みことばの教えをすなおに受け入れるよりも、みことばを自分の経験や伝統のものさしで測ることがあります。みことばが描いている神様の姿をそのまま信じ受け入れるのではなく、私たちは自分の理解で神様を測ろうとするのです。特に、自分の理解が及ばない困難や葛藤に直面すれば、そのような状況は神様が支配していないのではないかと疑いや焦りを抱くこともあります。そして、自分の考えを優先することがあるのです。すなおに受け入れて、身をゆだねることよりも、自分の理解や知識を優先するのです。私たちは何かしらの自分のレンズを通して、神様やみことばを見よう

とする肉の性質を持っています。残念ながら、私たちの罪の性質の中に、みことばや神様をすなおに受け入れない思いがあります。そして、問われることは同じです。私たちも肉によってさばく者であってはいけないのです。限りのある人の基準や不確かなものさしによって、神様やみことばを勝手に判断するのではなく、どのような時も神様のみことばの前にへりくだって、主とそのことばを受け入れることが私たちにとっても大切でした。

パリサイ人たちの高慢な心をご存じだったイエス様は、彼らを強く非難しました。あなた方は肉によってさばいていますと、あなたの判断は間違っていますと。しかし、それで終わったわけではありません。15節の後半でイエス様はこのように言っていました。「……わたしはだれをもさばきません。」と。イエス様は何を言わんとしたのでしょうか？イエス様は、ただパリサイ人と自分との違いを強調したのです。自分は彼らと同じようなやり方でだれをもさばくことはありませんと。自分は彼らのようにうわべだけの人の基準によって、さばくことはだれに対してもありませんと。イエス様のなされるさばきは、軽率な表面的なものでは全くありませんでした。

それでは、どのようにさばかれるのか、この方のさばきはどのようなものなのか、16節にこのように続いています。「しかし、もしわたしがさばくなら、そのさばきは正しいのです。なぜなら、わたしひとりではなく、わたしとわたしを遣わした方がさばくのだからです。」と。多くの方がご存じのとおり、一度目にイエス様が世に来られた時、その目的は罪人を救うためでした。ヨハネ8：17で、イエス様がこの世に来られた目的がはっきりと書かれていました。「神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。」と。一度目にイエス様は愚かな罪人を救うために来てくださいました。それがイエス様の来られた目的でした。しかし、これは何もイエス様がいっさいさばきを行わないという話ではありません。この方はあわれみ深い救い主であるのと同時に、父なる神様からさばく権威を与えられていた正しいさばき主でした。5章でイエス様自身が何度も何度も口にされていたことでした。ヨハネ5：22で「また、父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子にゆだねられました。」と。27節で「また、父はさばきを行う権を子に与えられました。子は人の子だからです。」と。そして、最後にもう一つ、30節にこのように書いていました。「わたしは、自分からは何事も行うことができません。ただ聞くとおりにさばくのです。そして、わたしのさばきは正しいのです。わたし自身の望むことを求めず、わたしを遣わした方のみこころを求めるからです。」と。この世の中には不確かなことがあふれています。一年後、一カ月後、一週間後、一時間後、一分後、私たちには何が起こるのかを予想はできたとしても、断言することはできません。

しかし、そのような世の中にあっても確かなことが一つあります。それは、私たちがみないつの日か地上で最後の日を迎えて、そして、正しいさばき主であるイエス様の前に立つ日はやって来るということです。例外はありません、別のみことばもこの将来の揺るがない約束や事実を明らかにしていました。ヘブル9：27でもこのように書いています。「そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように、」と。また、ヘブル4：13でもこのように言われました。「造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。」と。イエス様の前に立つ日はやって来ます。そして、この日はイエス様を信じ救われた者にとっては、喜びの日になります。この地上でだれにも気づかれず、感謝もされず、隠れたところでしてきた小さな働きであっても、すべてをご存じで、ご覧になっている主が、その働きにふさわしい喜びの報いを私たちに与えてくれる時が来るのです。しかし、逆にイエス様をかたくなに拒み、信じなかった者にとっては、この日は最悪の絶望の日になります。ひとり隠れてこっそりと犯した悪も、心の中でただつぶやいていたその汚れでさえも、すべてをご存じで、ご覧になっておられる主がその悪にふさわしいきびしい罰を与える時が来るのです。心の内側さえすべてをご存じのイエス様のなされるさばきは、当然うわべだけの表面的なものではありません。人の基準ではなく、真実の神様の基準によってなされるさばきは、不確かな誤ったものではありません。父なる神とともに行われる正しい審判者のさばきは、

どのような場合であれ、いつも正確で正しいものでした。そして、そのような正しいことを行われる主が、審判者が言われていたのです。「わたしは、世の光です。」と。必ず正しいことをなされる方がこのことばを残されました。このことばほど真実にあふれたものはありません。天から来られた正しいさばき主のことばは、私たちがどのような時でも信頼することのできる真実のことばでした。

3. 証言者の支持者のゆえ 17-20節

そして、最後にもう一つ、どうして御子のことばが信頼できるのかの三つ目の理由は、証言者であるイエス様を支える者、支持者のゆえでした。ことばを語った証言者であるイエス様についてあかしを立てる者がいました。あかしを立てる者が、いつも真実なお方であることがイエス様の証言を確かなものとしたのです。みことばを見てください。17-18節にこのように記されていました。「:17 あなたがたの律法にも、ふたりの証言は真実であると書かれています。:18 わたしが自分の証人であり、また、わたしを遣わした父が、わたしについてあかしされます。」と。気づかれたと思いますが、イエス様はここで先に、パリサイ人が非難していたその点についてあえて触れていました。イエス様は知らなかったのではありません、十二分にわかっていたのです。律法によれば、有効な真実の証言には少なくともふたりの証言が必要だと言うのです。イエス様はわかっていました。そして、それゆえに彼らに向かって言われたのです。もしあなた方が天から来た私の起源や正しさでも満足せずに、まだふたりの証人が必要だと言うのなら、その証人を私は与えましょう。その証人は、わたしを遣わされたお方、父なる神様です。ほかのだれでもありません、あなた方が熱心に礼拝をささげ、従い、尊敬を払っている父なる神様がわたしの第二の証人です。父なる神が、わたしのことばが真実であることを支えている支持者なのです。イエス様のことばを支えていたのは、天におられる父なる神様でした。

そして、容易に想像できると思いますが、この発言は彼らをいらだたせ、不快にするのに十分すぎることばでした。以前、同じようにイエス様が「わたしと父とは一つです、一つとして働いています」と主張した時、民の指導者たちは激しくイエス様を迫害し、いのちを奪おうとさえしました。5:17-18にこのように書かれています。「:17 イエスは彼らに答えられた。「わたしの父は今に至るまで働いておられます。ですからわたしも働いているのです。」:18 このためユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとするようになった。イエスが安息日を破っておられただけでなく、ご自身を神と等しくして、神を自分の父と呼んでおられたからである。」と。宗教に熱心だった彼らにとって、自分たちの知っている神を侮辱されることは死に値するほどの大きな罪で、到底受け入れられることばではありませんでした。ですから、彼らに今回の場面でもこのように答えられたのです。

19節に「すると、彼らはイエスに言った。「あなたの父はどこにいますか。」……」と。この表現は日本語の聖書ではかなり読み取りにくいですが、ここで「彼らはイエスに言った」と訳されている「言った」ということばには、動作の繰り返しを表す動詞の形が用いられていました。私たちが「言った」と聞くと、パリサイ人たちが一回だけイエス様に向かってそのことばを発したと思いますけれども、もともとのことばで言い換えるとしたら、「彼らはイエスに言い続けた。」と訳することができます。イエス様が「ご自分の父と一緒にいる」と言われた後、パリサイ人たちはイエス様が何を言っているのかよくわかりました。だからこそ一回だけではなく、彼らはひとりまたひとりと、ひっきりなしに同じ質問を投げかけ続けました。それほどまでにその質問の答えに関心を持ったからでしょうか、いいえそうではありません。彼らは「天の父がわたしの証人だ」と訴えるイエス様のことを鼻で笑って、皮肉を込めて問い続けたのです。父が支持者ですかと、何言っているのですかと、どこにその父がいるのですかと。彼らの心は非常にかたくなでした。暗やみの中にあって、彼らは真理を拒絶しただけではありません。彼らは自分たち自身の霊的状态にも盲目になっていました。ですから、はっきりとイエス様は彼らに言われました。続きの19節にこのように書かれています。「……イエスは答えられた。「あなたがたは、わたしをも、わたしの父をも知りません。もし、あなたがたがわたしを知っていたなら、わたしの父をも知っていたでしょう。」」と。パリサイ人に

とって、これはショッキングな一言でした。なぜなら、彼らは自分たちこそがだれよりも神様のことを知っていると、誇りに思っていた者たちだったからです。自分たちこそが神様と正しい関係にあると確信していたのがパリサイ人たちでした。

しかし、心のうちをご覧になられるイエス様は、それは現実ではありませんと述べるのです。どうして彼らは神様のことを知らなかったのでしょうか。それは父なる神様を知る唯一の方法は、御子を知ることから始まるからでした。イエス様が言わんとしたことは明白でした。父なる神様を信じる者は、イエス様をも信じ、イエス様のことを否定する者は、父なる神様のことも否定します。父と子が一つであるからどちらかだけを拒むことも、どちらかだけを信じることもできません。父なる神を知っている者は、子なる神、イエス様のことをも知っています。しかし、あなたはイエス様のことがわかっていないのですから、父のことも知りませんと。これと同じことは、みことばに何度も、何度も繰り返されていました。特に、私たちが見ているヨハネの福音書は、ずっとイエス様がだれなのかを教えようとしています。1：18にこのように言われていました。「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。」と。またこれに加えて、「私たちに父を見せてください。そうすれば満足します」と願った弟子のピリポに対しても、イエス様は14：9－11で次のように答えていました。「：9 イエスは彼に言われた。「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください』と言うのですか。：10 わたしが父におり、父がわたしにおられることを、あなたは信じないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、わたしが自分から話しているものではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざをしておられるのです。：11 わたしが父におり、父がわたしにおられるとわたしが言うのを信じなさい。……」と。

そして、繰り返されていることばのとおり、天から来られた御子は、父がどのような存在なのかを地上で明らかにされました。遣わされたイエス様の話すことばは、父なる神様のことばであり、イエス様のなされるみわざは、どれも父なる神様のみわざでもありました。だからこそ、もしへりくだって御子イエス様を見ているのなら、そこに御父の姿を見出すことはできたのです。しかし、パリサイ人はそのような御子を拒みました。本当の意味で、神様を知りたいと願わずに自分たちの思い描く神様のものさしで、御子を測ろうとしていたからこそ、その高慢さのゆえに彼らは「世の光」を認めることができなかつたのです。悲しいことだと思いませんか？すぐそこに確かに救いをもたらす光はありました。しかし、その光よりもやみを愛した彼らは、御子イエス様のことばをすなおに受け入れるのではなく、この方のことばは信じられないと自ら跳ねのけたのです。

果たして、今の私たち自身はどうでしょうか？みことばが私たちに教え続けているとおおり、「世の光」である御子イエス様のことばは、いつでも私たちが信頼できるものです。証言者としてのイエス様の起源、天から来られた方であることを覚える時に、正しいさばきを行われるイエス様の正しさを覚えた時に、またイエス様を支えている支持者である天の父を思い出す時に、この方はどのような時も、すべてをゆだねることができる確かに真実なお方であると、私たちは確信することができます。イエス様は神様のことばを語られたまことの神様だったのです。そうだとすればどうでしょうか、御子とそのことばをどのような時も真実なものであると、今、信じ受け入れているのでしょうか？それとも、人の基準や世の考えに基づいて、勝手にみことばをジャッジして、すなおに受け入れることを拒み続けているのでしょうか？

「世の光」である方に対して、受け入れたくないと拒み続けてはいないでしょうか？みことばは教えてくれていました。私たちの希望は、「世の光」として来られた方のうちにあります。「世の光」として来られた方が真実であるからこそ、この方が言っていたことばも、教えてくれた約束も、それらはすべて真実でした。「世の光」の方のうちにのみ、罪人の私たちにとって暗い心を照らす救いや罪の赦しがあります。

「世の光」として来られた方のうちにのみ、私たちにとって本当の満足や安心をもたらしてくれる守りがあり、「世の光」として来られた方のうちにどのような時も私たちが歩んでいく足の灯火となる導きがあ

ります。どのような時も、ともにいてくださる「世の光」とともに歩むのなら、やみに勝利することができ、そしていつもいのちの光を持って歩むことができるという約束とともに、私たちは生きていくことができます。「世の光」が真実であるからこそ、私たちは確信を持って生きて行くことができるのです。来られたお方は、決して変わる事のない真実の「世の光」でした。その真理を覚えるのであれば、私たちにできることは、この真実の方の前にただへりくだって、そのことばとその方をすなおに信じ、従い続けていくことです。この方の揺るがないことばと約束に喜びと希望を見いだす者として、今週もともに歩み続けていきましょう。